Résltats des Campagnes MUSORSTOM, Volume 17. —B. Séret (ed.). 1997. Museum National d'Histoire Naturelle, Paris. 213 pp. ISSN 1243-4442. ニューカレドニア近海でフランスのORSTOMが実施している深海調査で採集された魚類を扱った論文集．Séretによる調査に関する概論に続き，チゴダラ科，Euclichthyidae，アシロ目，サギフエ科，ホウボウ科，クロタチカマス科，カレイ目およびフグ目を扱った8論文が収録されている． (KM)

Basal Teleosts and Teleostean Phylogeny. —Gloria Aratia. 1997. Paleo Ichthyologica, 7. Verlag Dr. Friedrich Pfeil, München. 164 pp. ISBN 0724-6331. 化石魚類の尾鰭骨格をはじめとした比較形態学の著作で知られている著者の最新作．真骨魚類の上位分類群の新たな提唱など，重要な内容を含む論文． (KM)

Molecular Systematics of Fishes. —T. D. Kocher and C. A. Stepien (eds.). 1997. Academic Press, London, Tokyo. 314 pp. ISBN 0-12-417540-6. 魚類の分子系統学に関する17章から構成されている．対象とする分類群は大小さまざまで条鰭類全体（Lydeard and Roe，17章）からサケ亜科（Phillips and Oakley，10章）などの種より上の分類群を論じた章やニジマスの地方個体群（Nielsen et al.，5章）など種レベルの問題を扱った章もあり，魚類を分子レベルから研究する会員や系統分類に興味のある会員にとっては必携の書． (KM)

□ **魚類生態学**

Fish Communities in Lake Tanganyika. —H. Kawanabe, M. Hori and M. Nagoshi (eds.). —1997. Kyoto University Press, Kyoto. 298 pp. 18年に及ぶタンガニーカ湖の魚類群集の研究を集大成した出版物．14篇の論文からなり，タンガニーカ湖のシクリッドの生態，行動，種間・種内関係，系統関係などを扱っている． (KM)

会員通信・News & Comments

魚類学雑誌
44(2): 114–115

第9回ヨーロッパ国際魚類学会に参加して
On the Ninth International Congress of European Ichthyologists, Trieste, Italy, August 24–30, 1997

本年8月下旬の1週間にわたって，イタリア北部の港町トリエステで開催された第9回ヨーロッパ国際魚類学会(CEI9)に参加した．この国際会議は4年に1回，ヨーロッパの各国で開催されるスタイルをとっており，前回（1993年）のホスト国はスペインであったと聴いている．

今回の大会会長を勤めたのは，ナポリにあるMezzocannone大学動物学部のP. G. Bianco教授で，日本魚類学会の会員でもある．彼に直接聴いたところでは，大会への参加者は約60ヶ国，350人にのぼったと言う．彼が誇らしげに語ったように，規模から見ると，盛会であったと言えるだろう．日本からの参加者は，高木和徳，上野輝弥，鈴木淳志，数本美孝の各氏と私の5名であり，いずれも日本魚類学会の会員の方々であった．

大会は，昨今の世界的な関心事である生物多様性の問題を意識した「魚類の多様性(Fish Biodiversity)」をメインテーマとし，シンポジュウム形式で行われた．実際にプレナリー講演や一般講演が始まったのは25日から．この後，28日のエクスカーションをはさんで，29日までの4日間にわたって，以下の10セクションに分かれて発表が続いた：1) Paleontology, 2) Ecological Genetics, 3) Cytogenetics, 4) Adaptive Ecology, 5) Fish Communities and Trophic Interrelationships, 6) Anatomy and Histology, 7) Ontogeny and Larvae, 8) Ecotoxicology and Radiation, 9) Systematics and Biogeography, および10) Conservation and Fisheryである．

発表演題リストを見ると，海水魚に関するものがきわめて少なく，8割以上が淡水魚を扱ったものであった．淡水魚の種分化，生態，保護などに興味をもつ私には，日頃なじみの薄いヨーロッパを中心とした各地方の淡水魚に関する多様な生物属性を知る上では，少なからず有意義であったと言える．しかし，全体的にはローカルな話題が多く，また魚類の多様性問題に関して，なにが最も重要な課題であるのか，どのような切口で問題解決にアプローチすべきなのかといった，メインテーマを掘り下げる講演や論議が乏しかったと，私には感じられた．

一方，9)や10)のセクションにおいて，開発の進んだヨーロッパの国では，もともと豊富ではない淡水魚の多くの種や個体群がさまざまなレベルで絶滅の危機にあることをリアルに理解できた．現状を放置すれば，日本でも同様の現象が進むことは間違いないことから，この問題への魚類研究者としての取り組みの必要性を強く感じさせられた．

以上が，この会議に始めて参加した印象である．主に2)，4)，9)のセクションに参加していた私には，必ずしも全体を把握できていないかもしれない．しかし，4年に1度，ヨーロッパの魚類学者が集まって開く学会であることから，親睦，お祭りの要素が強くなるのも仕方がないのかもしれない．次回は，4年後にスイスで開催される予定である．自分で参加して確かめられるのが，一番確かである．

(後藤　晃　Akira Goto: 〒041 函館市港町3-1-3　北海道大学水産学部)

魚類学雑誌
44(2): 115

教官公募についてのお知らせ

下記の要項で教官公募の案内が来ましたので，掲載します．

平成9年9月18日

関係機関の長　殿
関係学部，学科等の長　殿
関係各位　殿

東京大学海洋研究所長
平　啓介
教官の公募について(依頼)

このたび，当研究所では下記の要領で教官を公募します．

つきましては，関係各位にお知らせいただくとともに，適任者の応募について，よろしくお取り計らいくださいますようお願いします．

記

1．採用人員
東京大学海洋研究所　漁業測定部門　助教授　1名

2．漁業測定部門の研究内容
当研究部門は，生物計測手法の開発も含め，広く海洋生物の行動特性と生理・生態機構を解明することを目的としています．またこれらの成果を海洋生物資源の保全と持続的利用に資することをねらいとしています．現在は魚類の回遊行動に関する生理・生態学的研究を行うとともに，群行動，攻撃行動，摂餌行動など魚類の基本的な行動の発現・発達のメカニズムに関する研究を進めています．また沿岸藻場生態系の環境・機能に関する研究も行っています．

本公募では行動学，生態学，生理学などの広い分野の研究者を対象とし，海洋生物資源の諸問題に斬新な着想と手法で意欲的に取り組む方を希望します．また本学の大学院農学生命科学研究科水圏生物科学専攻の教官として，大学院教育にも携わっていただきます．

3．提出書類
1) 履歴書
2) 研究業績目録(原著論文，総説，その他に分けること)
3) 主要論文5編の別刷(またはコピー)各1部
4) これまで行ってきた研究の概要と今後の研究に対する抱負(1200字程度)
5) 推薦書1通または応募者について参考意見を述べることのできる人の氏名および連絡先(2名)

4．公募期限
平成9年12月31日(水)必着

5．提出書類送付先(簡易書留で送付のこと)
〒164 東京都中野区南台1-15-1
東京大学海洋研究所
所長　平　啓介

6．漁業測定部門の職員構成

教　授	塚本勝巳	教務職員	稲垣　正
助教授	(本公募)	技術官	青山碩子
助　手	小松輝久	技術官	大矢真知子
助　手	石田健一		

問い合わせ先　電話: 03-5351-6517(塚本)
e-mail: ktpc@ori.u-tokyo.ac.jp